

子どもの不登校を経験した母親に関する臨床心理学的研究

—不登校児童・生徒の母親の語りから—

心理臨床学専攻 岡 田 明日香

I. 研究の目的

近年、不登校児童・生徒数は、4年連続横ばい状態にあったが、平成19年度文部科学省学校基本調査速報は、平成18年度の不登校児童・生徒数が二度目の過去最高を更新したことを発表した。

不登校支援は、不登校児童・生徒への支援のみならず、親や教員といった子どもをとりまく人々への支援も共に行われてきた。特に、親を対象とした研究報告は多い（小野:1993, 板橋:2000）。小野(1993)は、不登校児童・生徒の母親の変化過程仮説を提案し、子どもの不登校初期、母親は「不安・混乱期」を過ごすことを示している。また、肥田・大久保(2006)は、不登校児やその親たちは、困難な状況と予測のつかない将来に対して大きな不安を感じていると報告している。不登校児童・生徒のシグニフィカントパーソンである親の心理的背景は、子どもと同様に苦悩に満ち、混乱していることが多い(久留,2003)。不登校問題は、子どもの危機としてのみだけではなく、親への危機としても同様に危惧される。

そこで、本研究において、不登校児童・生徒の母親に焦点をあて、母親の語りより、個々の文脈に沿って母親達の生きられた経験(lived experience)の記述を試みる。また、そこから見出される共通性をより明らかにすることを目的とする。そして、不登校児童・生徒の母親への心理臨床的援助における手がかりとして示したい。

以下、リサーチクエスションを4点挙げる。

1. 母親は、子どもの不登校をどのように経験しているのか。
2. 母親は何らかの混乱を経験しているのではないか。
3. 子どもと共にした不登校経験は母親にとってどのような経験として意味づけられているか。

4. 母親は周囲からどのようなサポートを受けており、それが母親の経験の中でどのような意味づけをなされているのか。

II. 研究の方法

本研究において、ポリオ,トーマスら(1997)が提示するフローチャートを参考に調査を進めた。

1. 事前調査

- 1) 調査時期 2006年12月
- 2) 調査対象 親の会を通して知り合った親1名
筆者の知り合いの親1名

3) 調査手続き

質問によりインタビュー어의語りを特定することのないよう、質問は特に設定せず、非構造化面接を行った。また、インフォームドコンセントを行い同意書に署名をもらった。

4) 調査結果

調査において、①母親は葛藤や不安、戸惑いといった感情を経験していること、②子どもに関するエピソードに加え、親自身に関する語りがあること、③両者共に、なんらかの支えやサポートを受けていることが話された。

2. 本調査

- 1) 調査時期 2006年12月～2007年9月
- 2) 調査対象 ボランティア団体や親の会を通して依頼し、同意を得られた母親14名

3) 調査手続き

面接は、半構造化面接であり、質問：「子どもさんが学校に行かなくなられたときのことについて、ご自由にお話し下さい」からはじめた。時間は、約1時間半～2時間半程度である。また、一人のインタビューーに対し2回の面接を行った。倫理について、面接時に対象者へインフォームドコンセントを行い、個人情報の保護と管理を徹底

した。

Ⅲ.分析

全インタビューの逐語録を作成後、Paul F. Colaizzi (1978) による分析方法を用いて分析を行った。また、「第一の過誤」(下山,2004)を防ぐためにも、指導者、院生らの第三者による分析の協力を依頼した。

Ⅳ.結果

研究結果において、「不意」、「不安」、「揺らぎ」、「原因探し」、「ターニングポイント」、「経験の捉えなおし」、とテーマが現れてきた。

| |
|--|
| <p>[不意] 母親は、子どもの不登校を「不意」の出来事として経験する。母親達は、何が起ったのかと驚き、目を疑い、まさかわが子と感じた。□例：まさか、想像もしていない、驚き</p> |
| <p>[不安] 母親達は、わが身に起こった出来事に、これからどうなるのだろうと未来を見出せずに不安を感じる。□例：何なんだろう、どうしよう、これで本当に大丈夫なのか、将来大丈夫なのか</p> |
| <p>[揺らぎ] 母親達は、この出来事を過ごす中で、母親たちに生じる思い、例えば、学校へ行ってほしいという思いや、将来への不安、このままでいいのだろうかという気持ちが、お互いで交差し、「揺らぎ」を経験する。□例：「行ってほしいオーラ」、同じような中学生を見ると後ずさりしたくなる思い、世間の目</p> |
| <p>[原因探し] 母親達は、なぜ子どもが学校へ行かなくなったのか分かったらと原因を探す。そしてその中で、多くの母親が自分自身に省みる作業をしている。□例：自分の何が悪かったのか、育て方が悪かったのか、夫婦喧嘩が悪かったのか。</p> |
| <p>[ターニングポイント] 母親は、「理解できる」「整理できた」「変わる」といったきっかけを経験する。□例：子どもを守ろうと思った、自分を出そうとした、分からないものが整理できた、母親の言葉でそのまま伝える。</p> |
| <p>[経験の捉えなおし] 母親達は、それぞれ、子どもの不登校経験について経験の捉えなおしをする。□例：「悪いことではなかった」、「無駄ではなかった」、「損はなかった」、「殻をやぶる」</p> |

Ⅴ.考察

1. 母親の子どもの不登校経験の構造とその変化

母親の生きられた経験の構造は、過去・現在・未来の連続性を絶たれることによって、それまでとは全く異なった仕方で現れた。母親は、それに「不意」を感じ、不意の出来事を経験する。母親は、絶たれた未来に気づき、その未来が「不在としての未来」であることにより、途方もない不安を感じる。また、母親の空間的な場の相貌には、他者、つまり子どもが加わる。しかもその子ども

は学校へ行っていたときの様子とは異なった様子でそこにおり、母親は、子どもが母親から最も近い場所にいるにも関わらず、子どもを遠くに感じ不安な世界を経験する。母親は、どうにかその空間的な場の相貌を変えようとする。また、母親は時間的経験の連続性を持たない世界で、既存の価値観、世間の目、子どもを思う気持ちなどが交差し、「揺らぎ」を経験する。そして、母親は、ターニングポイントを迎え、未来を志向する。しかも、母親が志向する未来は、姿を現しそこに在るのである。母親の時間的構造は、過去の子どもの記憶、未来への予期を背景にして意味を与えられ、母親は、先のある未来を見る。そして現在、母親にとってその経験は意味あるものとして捉えられ、母親の過去と未来の連続性の中へ組み込まれる。

Ⅵ.最後に

本研究では、母親の生きられた経験の記述を試みた。子どもの不登校という出来事は、母親にとって母親の生きられた経験から時間的経験の連続性を奪い、母親を揺るがすような出来事であった。また、この出来事は、再び時間的経験の連続性を持ちなおすことにより、母親自身がその出来事に意味を見出し、母親達は、再び歩き出していた。

記述によって、母親の生きられた経験を全て明らかにすることは難しい。しかし、ここで丁寧に作業を行っていくことにより、私たちは、今一步母親のいる世界に近づいたのではないかと考える。母親の世界への臨床援助的接近は、不安を抱え苦しんでいる母親の言葉や思いを援助者が知ろうとするとき、いくつかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。

最後に修士論文作成にあたり、ご指導、ご助言をいただきました先生方に感謝申し上げます。そして、多くのご協力をいただきましたお母様方に心より感謝いたします。お母様方とご家族のご健康をお祈りいたします。